
俺と棋士姫とバレンタイン

黒鉄大和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と棋士姫とバレンタイン

【Nコード】

N9315Q

【作者名】

黒鉄大和

【あらすじ】

文化祭の日、幽霊部員だった俺が何気なしに籍を置いている囲碁部へと顔を出してみると、彼女はちんまりと座って俺を待っていた。彼女との出会いが、俺を見知らぬ囲碁の世界へと導いていく。二人だけの囲碁部。俺は彼女との時間を過ごしていった。そして、それから四ヶ月の月日が流れたある日の事。俺は彼女にバレンタインデイトに誘われる……。黒鉄大和が贈る2011年バレンタイン作品。テーマは純愛と囲碁？ 完全新作短編（ネット的には中編？）、スタートです！

凡な俺と可愛い棋聖（前書き）

初めましてからこんばんわまで。どうも、黒鉄大和です。

今回はバレンタイン企画第2弾という事で、《純愛》と《囲碁》をテーマにラブコメを描いてみました。

今回は僕の十八番である戦記でもバトルでも、黒鉄大和の代名詞とも言うべきハーレム作品でもありません。第1弾《俺と妹と偽装デート大作戦》と似た感じの作風になっています。

完成度としてはまあまあという感じ。前回の俺と妹は企画から起承転結をしっかり決めてから書いたのに対し、今回は突然書きたくなっただけなので。

ただし、だからと言って手を抜いた訳ではないのでご安心を。

それでは2011年バレンタイン企画作品、どうぞッ！

凡な俺と可愛い棋聖

県庁所在地から延びる鉄道の沿線沿いにある郊外に立地している私立桜上高校。郊外だからこそ土地代が安いのか、二つ校舎が横長く延びているが特徴だ。

生徒がいるのは三年前に完成したばかりの四階建ての新校舎。三年生は二階、二年生は三階、一年生は四階という学年が上がることに教室の立地条件が良くなるという仕組みだ。

三階の奥の方にある二年四組は朝のホームルームまであと五分という事もあって多くの生徒が集まっており賑やかだ。五分前だがまだ数人が姿を見せていないのは問題かもしれないが。

そんな教室の窓側の一番後ろから二番目という絶好のポジションを獲得しているのが俺、山城秋斗^{やましろう あきと}。自分で言うのも何だが、至って普通な男子生徒だ。成績は平均より少し高いくらいで特に委員会にも属していない、部活だって平凡な囲碁部に属しているだけで、友達も多くもなく少なくもない。つまり特筆して何か目立っている生徒ではない訳だ。

「山城、お前も来るだろ？」

ぼーっと空を見ていた俺はその声にハツとなって意識を戻す。すると目の前にはメガネを掛けたいかにも真面目な男子生徒が俺を見ている。そいつは俺の反応を見て呆れたような表情に変わる。

「お前、俺の話聞いてたか？」

「あ、悪い。ちょっと聞いてなかった」

「ごめんちゃんと軽く謝ると、そいつは「ったく」といいつつも特に怒る様子はない。こいつの名前は田崎俊介^{たさきしゅんすけ}。小中高同じという、まあ腐れ縁みたいな友人だ。ちなみのこのクラスのクラス長を務めている、見た目通り真面目な奴だ。成績もいいし外見もそれなりにいいので女子に人気がある、性格が悪ければクラス中の男子の嫉妬の炎で上手に焼けてしまいうくらいの存在だ。」

「だから、明日みんなでカラオケでも行つて騒ごうぜって話しさ。
今年のバレンタインは土曜日の休日だからな」

「ああ、そうだったそうだった」

「クラスの半数くらいが参加するんだが、お前も参加するだろ？」

明日は世に言うバレンタインというものだ。日本では女子が好きな男子にチョコを渡す聖なる日　と言うが、最近は義理チョコだったり友チョコだったり、逆チョコなどが流行っていて本来の目的を多少を見失っている傾向があるが。これならアメリカのように男女関係なく渡せばいいのに、と考える俺は間違いだらうか？

田崎はこのバレンタインに合わせてクラスの男女を集めてこのようなイベントを開く。まあ、簡単に言えばみんなで上げれば恥ずかしくないという考えと義理でもいいのでチョコが欲しい男子の必死さが見え隠れするイベントって訳だ。ちなみに田崎の友好関係は広い為、他のクラスから何人も来るので結構盛大なイベントになる。「去年はお前の手伝いもあつて大成功だったからな。また手伝ってもらえると嬉しいんだが。どうせ来るんだろ？」

確定事項を事後承認を得るかのような物言いに、俺は若干呆れつつ言葉を返す。

「お前、俺に予定があるっていう前提条件を忘れてないか？」

「どうせお前暇だろ？」

これが長年連れ添ってきた友人の自分に対する人物評価だと思うと悲しくて涙が出てくる。どうやら田崎は俺の事をバレンタインに予定がない寂しい奴だと思っているらしい。実に腹立たしい事だ。「で、どうするんだ？」

来るだろ、と言いたげな口調で問う田崎。だが、事は君が思っているほどうまく運ぶものではない。それを今教えてやろう。

「残念だが、先約があるので俺はパスだ」

俺は自慢げにそう言つてやった。すると、田崎は心底驚いたような表情を浮かべる　なぜだろう、勝つたはずなのに胸に残るのは苦々しい敗北感しかないぞ。

「お前がバレンタインに予定あるなんて、今話題の2012年に世界は滅びるつても満更ウソじゃないな」

「表出る田崎。今日こそメエのその無駄にクオリティーが高い顔を平凡クラスにしてやらあ」

俺はキレながらスツと机の中に忍ばせてある鉄製の物差しを握る。縦に降りおろせば凶器に、横にして机の上で弾けば楽器に早変わりする万能アイテムだ。

「冗談だって、冗談」

俺の殺気を感じ取ったのか、半歩引きながら謝る田崎。俺は実に優しい人間だから謝られたらそれを無視してキレル事ができないのだ。まあ、後でこいつから借りているゲームのデータを消去しておこう。

「ちよつと待てッ！ 今お前世紀末的に恐ろしい復讐の計画を立ててたたるッ！？」

「そ、そんな訳ないだろ」

な、何て奴だ。俺の心の中の復讐劇を先読みしたとッ！？ そこまで好きなのかよあのギャルゲーッ！

ちなみに、外見はいいので女子にモテるにはモテる田崎だが、残念な事にギャルゲーやエロゲーをこよなく愛するガチオタだという事は付き合いの長い俺しか知らない禁忌だ。

友人の一生を左右する爆弾を持っている身としては、これは恫喝要素に入れてはいけない。ふざけ程度で使うにはあまりにも威力が強すぎる。軍隊が強すぎる兵器は使い勝手が悪いというのもうなずける気がする。

……というか、こんな奴にチョコを必死に上げようとしている女子が毎年何人かいるのだが、その子達にはご愁傷さまとしか言いようがない。

「それで、バレンタインに何の予定があるんだよ？ もしかして新作のギャルゲーの行列にでも並ぶのか？」

「お前じゃあるまいし。本当に先約があるんだよ。悪いな」

そう、冗談やウソではなく俺には先約がある。かわいい後輩の頼みとあれば、万年暇人の優しい人である自分としては見過ごせない。「ふうん、残念だな。せつかくイベントとか色々考えてたのにさ」「悪いな」

みんなを盛り上げようと体育祭や文化祭で奮闘していた姿からも見てわかるとおり、こいつはみんなで協力して何かをやるという事が大好きな奴だ。趣味は思いつきりソロプレイゲームなのだが。

田崎は「仕方ないな」と言って他のクラスメイトの所へ行く。バレンタインイベントともなると事前準備が忙しいのだろう。

そう、バレンタインなのだ明日は。

「……チヨコ、もらえねえな」

いつもなら田崎のイベントに参加して義理100パーセントでも何個かチヨコを貰えるのだが、今回はイベント不参加なので0となるだろう。

俺は何だか心細い気もしながら、小春日和な空を静かに見つめた。

その日の放課後、俺はいつものように第一校舎、生徒からは旧校舎と呼ばれているこの学校が創設された時からある校舎へと向かう。現在ここはあまり使わない教室や部活やクラブ、同好会などが部室として使っているある意味部室棟となっている場所だ。

旧校舎と言っても木造のボロボロという訳ではなく、ちゃんと鉄筋コンクリートでできたしっかりとしたものだ。二十年ばかり使用しているので確かに汚れてはいるが、まだまだ現役としてやっている。

俺はその三階の一番奥、第二校舎こと通称新校舎と呼ばれている場所から一番遠い部室へとやって来た。部室の扉の上には小さく《囲碁部》と書かれている。

俺は慣れた手つきでドアを開けた。

部室の中はいたってシンプルだ。元教室だけあって広さは十分。むしろ机や椅子が必要最低限なもの以外は全て排除されているので

広すぎるくらいだ。

教室後ろにある棚には生徒が私物を置く為のものだったのだろうが、今は部室の備品が置いてある。備品というか、部長の私物だな。部長の趣味でおいてある30cm水槽には部長が好きな熱帯魚が泳いでいる。確かコリドラスハステータスだったか？ 灰色の小さなかわいらしい魚が10匹ばかり自由気ままに泳いでいる。

棚の上には観葉植物がいくつか置いてあり、全体的に寂しい部屋を彩っている。

そして、部室の中央にはなぜかこたつが置いてあり　そこに彼女はちんまりと座っていた。

「……あ、こんにちは山城先輩」

ご丁寧にペコリと頭を垂れたのは小柄な少女。立つと平均的な身長^{きりしま}の俺の肩くらいまでの高さしかない。ボブカットに切り揃えた髪型に細い銀色のフレームをしたメガネが特徴の彼女の名は霧島小真^{きりしまこま}希。この地味めな目立たない子が一年生にしてこの部活の部長を務めている。

二年生である自分ではなく、一年生の彼女が部長を務めているのには少々込み入った事情があるのだが、今は省こう。

「お茶、用意しますね」

「サンキュ」

小真希は俺が部室に入るとこたつの上に置いてある急須を手に取り、電気ポッドから慣れた手つきでお湯を入れる。その間に俺は部室の隅に掛けられた突っ張り棒にハンガーを掛けただけの簡易クローゼット(?)に上着を掛け、ネクタイを緩めてリラックスした格好となつて小真希の前に座って足をこたつに入れる。暑すぎず、ちょうどいい温度だ。

「お茶どうぞです」

そう言つて小真希はお茶の入った田舎のじいちゃんが使いたそうな渋い湯呑みを俺の前に差し出して来る。ちなみにこれが俺専用の湯呑みだが、デザインのチョイスは俺ではなく小真希のものだ。

小真希の前にも色違いの少し小振りな、いわゆる夫婦湯呑みという感じで置かれている。囲碁部に属するだけあって、どうにもおばあちゃんっぽい子なのだ。

「サンキュ」

こいつに出会うまでお茶なんてほとんど飲んだ事もなかったのに、慣れとは恐ろしいものだ。今では全く違和感がなくなっている。

湯気を立ち上らせる湯呑みの向こうにはお饅頭が入ったカゴが置かれている。まさにお茶に合う和菓子という感じた。俺はそんなお饅頭を一つ手に取って口に放り込む。小真希曰く老舗の和菓子店のお饅頭なので絶品だそうだが、事実この饅頭は無茶苦茶うまい。正直これだけ食べに部室に来说っていると過言ではないかもしれない。まあ、そんな事小真希に言えばふてくされて饅頭を没収されかねないので口が裂けても言えないが。

饅頭一つを食べ終えた所で、俺は改めて部室を見回す。過度と言うほどでもないが、部室の各所には小真希の私物が置かれている。細々した物ならば別に構わないのだが、今自分が入っているこたつや水槽などは許容範囲を越えているのではないだろうか？

「まあ、温かいし癒されるのは事実だから別にいいけどな」

「え？ 何がですか？」

「何でもねえよ。ただ、平和だなあって思ってたさ」

「は、はあ……」

俺の言葉の真意がわからないのだろう小真希は曖昧にうなずく。そんなかわいらしい後輩の姿に微笑みつつ、俺は学校で自宅以上にくつろげる一時を楽しむ。しかし、ここは一応部活だ。お茶を飲んで饅頭食ってくつろぐのもいいが、活動をしなければならない。

囲碁部がなすべき活動は、当然囲碁だ。

「小真希、いつもの勝負を頼む」

俺の言葉を待ってましたとばかりに、小真希は嬉しそうにうなずき、横に置いていた碁盤を机の上に置く。それは十三路盤と呼ばれるタイプの碁盤で、初心者からプロまで扱う盤。一般的に囲碁と言

われて思い描くのは十九路盤であり、十三路盤はそれよりも二周りくらい小さい。

囲碁とは簡単に言えばこの盤上により多くの自分の陣地を獲得した方が勝ちという、陣取り合戦のようなゲームだ。

「それじゃ、いつものように私が白で先輩が黒。5子目でコミなしのハンデで」

「おうよ」

囲碁に詳しい人なら十三路盤で5子目、しかもコミなしというのがどれだけ激しいハンデかわかるだろう。

碁盤には中央に天元と呼ばれる中央点があり、端から上下それぞれ第3線が交差する場所、四隅それぞれ四力所に星と呼ばれる点がある。5子目はその全ての星と天元にあらかじめ黒石が事前に置かれている事を意味する。つまり、最初から四隅と中央という要所に黒の先兵隊がいるという訳だ。囲碁で隅は重要な得点陣地であり、中央もまたそうだ。その全てが最初から自分の勢力下にあるというのは、かなりの有利。しかも十九路盤ではなくより範囲の狭い十三路盤ならばなおの事。

コミとはその制度上、先手となる黒の方が有利となる為にあらかじめ黒がハンデを負うルールの事。一般的には6目半で、もしも黒が5目勝っていてもコミが入ると白が1目半で勝利となる。

十三路盤で黒に置き石のハンデを与えつつ、さらに自身が有利になるコミを捨てた状況。黒が俺なので、白の小真希はかなり不利な状況に見える。

だが、実際はこれくらいのハンデがないと俺は小真希とまともに戦う事ができない。何しろ俺は囲碁を本格的に始めてまだ三ヶ月も経っていない素人。一方の小真希は個人で様々な大会に出て実力を見せているプロ。本当のプロではないのであくまでアマチュアだが、その実力はプロに匹敵するとも言われている。囲碁検定三段の段位は伊達ではない。

こんな大人しそうで弱々しい感じの少女が、ひとたび囲碁という

戦場に赴けばまるで戦を知り尽くした武将のような烈火の快進撃を見せてくれるのは、今でも信じがたい。

「それじゃ、お願いします」

「お願いします」

囲碁を始める時の礼儀。互いに頭を下げてから対局が開始される。バレンタイムムードで街がきれいにライトアップやイルミネーションをされる中、桜上高校の一室では碁盤に石が置かれるパチツという音だけが静かに響く。

文化祭と遅れた出会

俺が小真希と出会ったのは四ヶ月前の事。桜上高校の文化祭が執り行なわれた、ようやく夏の暑さが取れて幾分か過ごしやすくなった日の事。

俺のクラスの出し物はメジャーなお化け屋敷。良くも悪くもない無難な出来だった。隣のクラスが女装喫茶だったのである意味力オスではあったが。

俺はその施設隊だったので前日までは忙しくダンボールを切ったり色を塗ったりとしていたが、お化け役は兼ねていなかったので文化祭自体は特に予定もなかった。

午前中は友人と校内を巡って様々な出し物を見て楽しんだ。軽音楽部や吹奏楽部の演奏は祭りのメインイベントに等しい。演劇部の劇はまあまあという所か。こう言っでは何だが所詮が学生レベルだからドラマのようにはいかない。緊張の為か棒読みになってしまった女子を見て、何となく微笑んでしまった。

運動部は校庭でイベントを行っていた。サッカー部は学生や子供、時には大人相手に簡易的なフットサルを行ったり、野球部は投擲のみやバットを使った的当てなどで盛り上がっている。テニス部もまたしかりだ。

一方の文化部は主に作品の展示がメインとなる。天文部は星座などの写真を展示し、美術部も部員の作品を展示している。こう言っでは何だが、文化部の出し物というのはあまり盛り上がらない事が多い。数少ない盛り上がっている場所と言えば料理体験ができる家庭科部やカルメ焼きで子供達の心をガッツリ掴んだ化学部くらいだろう。

一年生の駄菓子屋で特に意味もなく祭りのノリで買ってしまった綿菓子片手に、俺は部活やクラスの出番がある友人達と別れて一人になった。

「さて、どうしたものか」

俺は何をするでもなく廊下の壁に背を預けてぼーっと天井を見上げてみる。

この学校の生徒の多くは部活に属している。これは学校の方針で部活に属す事を前提に、属さない者は放課後の補修やボランティアに強制参加が義務付けられているからだ。一部、生徒会や各委員会に属する場合は免除だが、単純な帰宅部は強制参加となる。

勉強が好きという奇特な学生以外は皆仮にでも部活に属したがる。それが例え幽霊部員だとしてもだ。

かく言う俺もその幽霊部員の一人だ。籍は一応あまり規則に厳しくなさそうな囲碁部に置いたが、実際に活動している場所に行った事はない。噂では囲碁部全員が実質帰宅部だというのだから何の負い目も感じない。

ずいぶん昔に囲碁をテーマにしたアニメが放送された時は全国的に囲碁部の部員は増えたが、現在ではまた元の状態に戻っている。この高校の場合はさらに悪く、廃部寸前の所を仮初の部員で残っているに過ぎないらしい。

正直、囲碁なんてやった事はない。国営放送にチャンネルを回した時に時たま見かける事はあるが、すぐに変えてしまうので囲碁なんて板の上で白黒の石を置きあう古めかしいゲーム、としか印象を持っていないのだ。

なぜか、俺は囲碁部の事を考えていた。周りたい場所は全部回つたし、自分がなすべき仕事がなく暇を持て余す身としては、唯一自分が行く理由のある囲碁部の事が気になったようだ。いつもなら思考の隅にも置かないのに、これも祭りの影響って奴か。

「行ってみるか……」

俺はポケットに突っ込んでいたいかにも学生が作ったっぽい簡素なパンフレットを取り出し、囲碁部が活動している場所を調べて歩き出した。

祭りの喧騒は主に運動部やクラスの出し物が中心となっているが、文化部が集中する第一校舎はそんな第二校舎に比べて静かだった。何というか、ちょっと涙が出てきた。

しかも囲碁部はそんな静かな校舎の一番端っこに位置しているらしい。喧騒の《け》の時もなくなつた場所に、その部室はあつた。他の部のように部室の前に設置されている各部の掲示板に紙で切り抜いた囲碁部とだけ書いてある簡素なもの。下には《お茶もお出しします》という寂しい宣伝文句が書いてある紙が貼つてあるが、こんな辺境の地にまで来てお茶を飲むのような人間はまずいないだろう。

何となく、もう帰つてしまおうかとも思ったが、ここまで来たのだからと自分に言い聞かせて俺はドアを開いた。

中もまた涙ぐましい。弱小部なりにがんばつたのか、折り紙の輪飾りが部室全体をグルッと囲んではいうが、飾り付けらしいものはそれくらいだ。

部屋は元教室だけあって広く、今は二つ一セットの机が六個ばかりに置かれ、各所にはテレビで観たあの囲碁盤が置かれている。横には白黒の石が置かれたケースが置かれている。

部屋をグルッと見回すと観葉植物が何個もあり、なぜか教室背後の棚には水槽が置かれて魚が泳いでいる。

そして、一番驚くのはそんな部屋の隅に置かれた、これまたなぜかこたつ。そこに一人の少女がちんまりと座つていた。

まさに文化部少女と言うにふさわしいメガネを掛けた少女は一人で本を片手に囲碁をやっていた。他に人の姿はなく、今ここにいるのは俺と彼女だけ。

本格的に帰ろうと思って踵を返そうとした時、どうやら向こうがこつちに気づいたらしい。俺を見て驚いたように目を丸くすると、自分の状況を見て顔を赤らめて慌てて立ち上がりこちらへと小走りにやって来る。

「あ、あの、いらっしやいませ……ッ。い、囲碁部へようこそッ

!？」

見事に最後噛みやがった。さっきの演劇部の女子以上に緊張してるぞこりゃ。まあ、恥ずかしくて顔を赤らめている所なんかはかわいいが。というか、マジでかわいいんじゃないかねえかこいつ？

容姿は小柄の為少し幼げに見えるが、肌は白く目はクリツとして、唇は薄桃色で柔らかそう。雑誌なんかで見るモデルともテレビなどで見るアイドルともまた違うかわいらしさ。正直、今まで会って来た女子の中で一番んじゃないかこいつは。

そんな下心丸出しな思考を巡らせていると、向こうも黙っている俺に困っているのか一人で狼狽している。

「あ、すまん。えっと、ここは一応囲碁部でいいのかな？」

「は、はい」

「君一人だけ？」

「……は、はい。一応部が存続できるだけの人数は登録されているんですが、私以外皆さん籍だけ置いていらっしゃる方々らしいので。私一人でやらせていただいています」

健気にはにかむ少女の言葉に、俺は全力で土下座して生まれて来た事を来世まで謝り続けたい衝動に駆られた。すまん、俺はその籍だけ置いている幽霊部員のクソ野郎の一人です。

何となく気まづくなり、何を話せばいいのか困惑していると、少女は「あの、もし良ければ席に座ってください」と緊張気味に言う。ここで断ればこの場から逃げられたが、これはあくまで俺の想像かもしれないが、どうやら俺がこの囲碁部来客第一号だったらしく少女は何としても座ってもらいたいという気迫というか気持ち隠し切れずに大放失してしまっている。どうやらすでにこの扉を開いた時点で退路は断たれていたらしい。

部屋から出て行く事もできず、目の前には必死に部屋へ引き入れようとしている少女が一人。俺は「さ、サンキュ」と言っただけで部屋へと一歩を踏み入れた。

「あ、こ、こちらにどうぞ……」

少女は一番手前の席に俺を案内する。俺が案内された席に座ると少女はこたつの方へ向かい、そこに置いてある電気ポッドから慣れた手つきで紙コップにお茶を注ぐ。どうやら紙コップのビニールを破っている所を見ると、本当に俺が来客第一号だったらしい。

「ど、どうぞ」

緊張しながら少女は俺の前にお茶を置き、「失礼します」と前置きしてから俺の対面へと座った。当然俺と彼女は向き合う形になる。より気まずい状況になって困る俺に対し、少女は意を決したように伏せていた顔を上げる。

「あ、あの。幾つか質問よろしいですか？」

「い、いいぞ」

「その、この学校の生徒さんでいいんですよね？」

「あ、ああ。二年生だ」

桜上高校の制服は特筆して他の学校のデザインと差異はない。特に今は夏服をまだ使っているので、男子の夏服なんてズボンとワイシャツだけなので、一見ただけでは他校の生徒と見分けがつかない。特に文化祭ともなれば他校の生徒も来るので尚更だ。

「じゃあ、やっぱり上級生なんですね」

「という事は、君は一年生？」

「はい。申し遅れました、私一年の霧島小真希です。一応この囲碁部の部長を務めさせてもらってます」

そう言って少女　小真希は自己紹介をする。部長を務めさせてもらっているという部分では若干恥ずかしそうに頬を赤らめた。

「一年生で部長って異例じゃないのか？」

通常部活というのは年功序列。上級生、主に二年生もしくは三年生が務めるものだ。この時期は三年生が抜ける部活もあるので、三年生の部長が入り乱れる季節。この文化祭を三年部長最後のお役目、もしくは新部長の実力披露とするのかは各部それぞれだ。

だが、そんな中で一年生の部長というの異色であり異例だが、俺は何となく予想ができ、そして罪悪感で顔がひきつる。そん

な俺の表情の変化に気づいていないのだろう、小真希は複雑な表情を浮かべながらうなづく。

「そ、そうですね。でも私以外の部員が同級生上級生問わず実質幽霊部員ですから、部の運営上活動している人に任せなければならないので、私が拝命させていただきました」

大変な仕事ですが一生懸命頑張りますという真っ直ぐな気持ち伝わってくるくらい、小真希は緊張しながら微笑んだ。その笑顔に俺の罪悪感はさらに重くなる。もはや朝食にトンカツを食べるくらいの重さだ。

俺が強烈な居心地の悪さ（完全に自業自得だが）を味わっているなど露知らず、小真希は次の話題へとステップを進める。

「それで、そのお……、先輩はなぜ今回囲碁部へ来ていただいたのでしょうか？」

ついに来たか、俺が最も答えづらい魔球が豪速球で一直線にジャストミートだ。

「その、自分で言うのもなんですが、ここは祭りの中心から最も離れた場所です。そこをわざわざ訪れていただいた理由をお伺いしたいのですが」

当然の質問であり、彼女からしてみれば何の問題もないだろう。

だが、ものすごく個人的だが俺にとっては見事な四面楚歌的な攻撃力拔群の問い掛けだ。

俺は一瞬、適当な理由でも並べてみようかと思った。「祭りの喧騒からちよつと離れたくて」とか「囲碁部ってあまり活動を聞いた事がないから気になって」、最悪「囲碁に興味があつて」でも通るだろう。

だが、本当にそれでいいのだろうか？

ここで逃げ道を作って、それを使って逃げてもいいのだろうか。

一人で寂しく部活を、それも対戦相手がいなくては成立しない卓上ゲームの部に、彼女一人を残してもいいのだろうか。俺が逃げれば、またこいつは一人で参考書片手に一人碁を打つ。対戦相手になんか

なれなくても、話し相手くらいにはなれるのではないか。

考えてみれば、一年生の頃から一度も来た事がなかったが、ここは俺の部活だ。そして、こいつは身勝手ではあるが俺の後輩。後輩の面倒を見るのは先輩の役目だ。

いや、言い訳なんてどれだけ並べたって意味がない。俺は純粹に、後輩を一人にさせたくないのだ。

こんな平凡な男子高校生一人に、必死になってここにいてほしいと願う彼女の瞳を見てしまったから。これ以上、彼女に悲しい思いはさせたくない。我ながら、実に身勝手に臭いセリフだと思う。実際、俺が後輩の立場だったら罵声の一つだって浴びせたいくらいだ。

今更勝手だとか、卑怯者と罵倒されてもいい。ただ、せめてこれからは細目に部活に出るべきだ。何しろ俺は暇を持て余している男子高校生なのだから。

知らなかったのなら何をしてもいい訳ではないが、知らなかったなら仕方がない事もある。だが、一度知ってしまったえばもう逃げる事はできないし、したくもない。

どうやら俺は、自分でも知らなかったが妙に変な正義感というか責任感があるらしい。内心苦笑しながら、俺はまだ熱々のお茶を冷まして一口含み、コップを置く。

「強いて言えば、自分の所属する部活がどんな状態なのか気になってさ」

言ってしまった。これで俺はもう自ら最後の退路を断ってしまった。どうやら俺の言葉はこいつの予想とは違ったのだろう、表情が明らかに驚き一色に染まっている。

「え、あの、囲碁部の方ですか？」

「籍を借りてただけの幽霊部員だけだな、悪かった」

「え？ あ、いえ、あの……」

いきなり会った事もない幽霊部員が現れて、しかも一方的に謝られる。こいつじゃなくても俺だって困惑するような妙な状況だ。

「ほら、この学校って部活に属してないと勉強会に強制参加でしょ？ だから、それを避けたくてさ。その、ほんとごめん」

「い、いえ。皆さんやっている事ですから、そんなに気に病まないでください」

「自己紹介遅れたね。俺は二年の山城秋斗、よろしくな」

「あ、これはどうもご丁寧に」

俺が名乗ると、礼儀正しく小真希は頭を垂れた。顔を上げた途端、俺と視線がぶつかる。その瞬間、小真希は小さく微笑んだ。ある意味裏切り者に等しい俺に向かって、だ。俺はそんな小真希の笑顔に応えるようにして口元を緩ませる。

「これからは、ちゃんと部活にも参加するよ」

「あ、お気持ちは嬉しいですが無理しなくてもいいですよ」

「無理なんてしてないさ。元々暇人だから時間には苦労しない

それに、女の子一人をこんな無駄に広い部屋に置いておきながら、それを無視できるほど俺は人間ができちゃいないからな」

言ってみて我ながら臭いセリフだなあと考えた。それを隠すように照れ笑いを浮かべると、小真希も照れたように頬を赤らめながらはにかんでいた。

「じゃ、じゃあお言葉に甘えさせてもらいますね。私、意気地がないから友達もいなくて、ずっと一人でした。だから、誰かと一緒にいられるのって、すごく憧れてたんです」

そう言っただけに微笑む小真希の姿に、俺はまたしても全力土下座したい気持ちになってしまふ。もう少し早く気づいていれば、そんな過ぎ去ってしまった時間を悔やむ。だが、そんなもの悔やんでもどうしようもないのもまた事実だ。

「それじゃ、早速ですが。囲碁部は囲碁部らしく、囲碁をしましょう。先輩、囲碁のルールはご存知ですか？」

とりあえず、俺が囲碁をできるかどうかを確認する小真希。だが残念ながら俺は今日まで囲碁というものとは一切触れ合わずに生きてきた為、当然ルールなど何も知らない訳だ。

「ごめん、全然知らないや」

正直に言っと、小真希は驚かなかった。予想通りと言った所だとうか。まあ、囲碁を知っていたら囲碁部で幽霊部員なんかやっていないだろうという簡単な推理ではあるが。

「そうですか。では、私がみっちり指導させていただきますので、覚悟しておいてくださいね」

「お手柔らかにお願いします」

嬉しそうに初めて満面の笑みを浮かべながら言う小真希に、俺もまた自然と微笑んでいた。

祭りの喧騒から掛け離れた囲碁部の部室で、俺は小真希と出会った。

夕焼けと聖夜の約束

あれから俺は週三回の活動日必ず部室に顔を出すようになった。

囲碁の打ち方自体はすぐに理解できたが、それをゲームとして自在にプレイできるようになるにはまだまだ時間がかかりそうだ。

俺は囲碁の打ち方を小真希に教えられながら、彼女との会話を楽しんだ。最初に抱いた印象の通り彼女はあまり自分から話掛けるような子ではないので、基本的には俺が話題を振って小真希がそれに答えるという形式だ。おかげで、俺は小真希の事を色々と知る事ができた。彼女も俺の事を知る事ができたと願いたい。

文化祭から始まり、体育祭、ハロウィンパーティー、クリスマス会とうちの学校は他校に比べてイベントが多い。小真希とはそれらと一緒に過ごしたりしながら、少しずつお互いの距離を縮めていった。

そして、今に至る。

「負けたあ……」

俺はため息混じりに言い、目の前に広がっている囲碁盤を見詰める。囲碁は白と黒の境目、国境みたいなものがしっかり制定されてお互いの陣地にもはや侵攻できない状況になって互いにパスした段階で終了となる。その後それぞれの陣地を数えやすいように整理し、互いに取った石を相手の陣地に戻して埋める。最終的にそれぞれの陣地で囲んだエリアの空白地帯、何も石が置かれていない場所の広さで勝敗が決まる。

今俺の目の前に広がっているのは、一見すると互角のように見えるが、実際はわずか2目差で俺が負けた。善戦しているように見えるが、こっちはかなりのハンデをもらって負けているという事をお忘れなく。

「やっぱり先輩は詰めが甘いです。星の下は意外と広いので、早々

に石を置いておかないと入り込まれた時に対処が遅れてしまいます。十三路盤ですから私も幾つか取られてしまいました。これがより広い十九路盤だったら先輩の陣地の多くが私に取られてましたよ」

敗北した俺の原因と改善を小真希は丁寧に教えてくれる。俺はそれを聞きながら、囲碁というゲームも難しさに唸ってしまう。下手なテレビゲームなんかより難しく、ここまで頭を使うゲームはそうないだろう。一手、二手先を読んでいないと簡単にやられてしまう。自分は黒なので先手を取れる為に先に攻め込める事ができるが、小真希は碁を使ってこちらを攪乱しつつ確実に自分の陣地を増やしていく。目先の事しか見えていない俺では、小真希の数手先を読んだ行動は理解出来ないし、対処もできない。

常に数手先を読む。このゲームはそれがとても重要になってくる。ただの卓上ゲームだと思っていたが、それは大きな間違いだったようだ。

少し冷めてしまったお茶を飲みつつ、俺は自分のミスを考える。あの時あそこに置いていけば。このゲームはそんな事ばかり考えさせられる。

「大会では基本的に十九路盤が主流なんだろう？」
「そうですね。20級周辺のブロックの場合十三路盤で行われる事もあります。次のブロックからは十九路盤が確定です。」

大会とはもちろん囲碁大会の事だ。各県運営の地区大会から全国大会まで様々あるが、とりあえず俺の当面の目標は地区大会に出る事だ。地区大会なら出場は申請すれば可能だが、そこで勝てるかどうかとなると難しい。

囲碁大会では自分が元々持っている級（俺はないので20級から始まる）周辺の級保持者が一つのブロックを形成し、その中で戦う。優勝などは各ブロックごとに行われるそうなので一つの大会に優勝者が複数いる事になる。まあ、当然だわな。段位クラスのブロック1位と15級くらいのブロック1位の人では実力に大きな隔たりがある。ブロックごとに一つの大会を形成するのは当然だ。

規模にもよるが、だいたい午前から午後を通して5戦くらい。その勝ち数によって順位が決まり、同時に自分の新しい級も決まる。

とにかく、実際に各都道府県の学校囲碁連盟が認定している級を保持する事は、その後の大会の基準となるし、自分の実力の目安にもなるので当然必要になってくる。その為にも大会に出る必要があるのだが、俺の実力はまだそこには届いていない。

「まだまだ先は長そうだな」

俺は心からそう思った。

そんな俺に小真希は「焦らず、ゆっくりでもいいので確実に行きましょう」と励ましてくれる。そんな彼女の心遣いに感謝しつつ、俺はお茶を飲み干した。

「あ、お茶のおかわりいりますか？」

「じゃあお願い」

「はい」

「お願いついでに悪いけど、もう一勝負頼むな」

「よろこんで」

小真希は嬉しそうにうなずき、お茶の用意をする。俺はそんな小真希の楽しい横顔を見て、この四ヶ月の事は無駄じゃなかったんだなあと感じた。彼女の笑顔を見ていると、心からそう思える。

お茶を持って戻ってきた小真希と俺は、再び盤を挟んで対局を始めた。

冬は日が落ちるのも早い。俺と小真希は日が落ちる前に下校する事にした。

夕焼けに染まる空を見ながら歩く俺の横を、小真希が並んで歩く。偶然にも帰る方向が一緒なのだ。

小真希は制服の上からセーターを着て、マフラーに手袋という完全防備。一方の俺は特にマフラーも手袋もしないでコートのみと比較的軽装。朝結構暖かったから気を抜いた為だ。正直、肌が出ている部分が寒い。もうすぐ春だと言うが、寒さはなかなかまだ抜け

ないのだ。

「先輩、寒くないんですか？」

そんな俺を気遣うように小真希が不安げに訊いてくる。それだけ重装備をしても自分だって寒いだろうに、本当にいい子だ。見ているだけで心和む。

「まあ、寒いわな。でもまあ、自己責任だし仕方ないさ」

笑いながら言うと、小真希は少し思案顔になる。少しの間があつて、小真希は自分のマフラーに触れながら上目遣いになる。

「あの、私のマフラー使いますか？」

俺は小真希の言葉に面食らったように驚くが、すぐに「いいっていいって。そんな事したら小真希が寒いだろ？」と笑いながら断る。断りつつも彼女の心遣いありがたい。

そんな俺の言葉に小真希は何か言いたそうだったが「そうですかとだけ言つてマフラーから手を外す。小真希は人の意見を無視して自分の考えを押し付けるような事はしない子だから、俺が「いい」と言えば納得はできなくても首を縦に振ってくれる、忠犬気質な子だ。

その言語を最後に、小真希は黙ってしまう。こちらも特に話し掛ける話題もなかったのではしの間俺達は無言で歩き続ける。

赤信号で横断歩道の前で止まった時、小真希は何を思つたのか自分のしている手袋の片方を取るとそれを俺に「どうぞ」と差し出して来た。

「いや、俺はいいってば。それにそれじゃお前が寒いだろ」

「平気です、こうすれば」

小真希はそう言つて手袋を俺に渡すと素手の方の手で俺の片手を握つてきた。さっきまで手袋に包まれていた手は温かく、女の子特有の柔らかさに不覚にも一瞬ドキツとしてしまった。そんな俺に、小真希は嬉しそうにはにかむ。

「これで寒くないですよ」

「お前なあ……」

そう言いながら、俺はつい笑ってしまった。今更手袋を返す事もできず、俺は「借りるぞ」と言って小真希の手袋を彼女の手を握っていない方の手に付ける。小柄な小真希用の為少しばかり窮屈だったが、冷たくなった手を温めてくれる手袋は、悪い気はしなかった。信号が青になり、小真希が一步前へ出る。

「行きますよ、先輩」

俺は手を引つ張る小真希の姿に微笑みながら、横断歩道へと一步踏み出した。

「あの、先輩。バレンタイン、何かご予定はありますか？」

それは数日前の事だった。いつものように部室に顔を出し饅頭を食べ、一局終わった(当然俺が負けた)後、小真希は突然そう訊いてきた。

俺は湯のみ片手に、水槽の前に立つて熱帯魚にエサを上げている小真希の方を見る。

「バレンタイン？　んまあ、特筆して予定らしい予定はないわな」

俺がそう答えると、小真希は「そ、そうですか」とつぶやく。俺は特に気にした様子もなく見事にハンデが意味を成さずに敗北した盤上を見詰め考える。今回はうまくできたつもりだったが、自分でも気づいていなかった脆い場所を突かれて自陣の防御壁が崩壊したのが痛手だったらしい。十三路盤で見落とすのに、これが十九路盤だったら発見は更に難しくなるだろう。

「あ、あのお。せ、先輩？」

「んあ？」

「バレンタイン、私とどこかに行きませんか？」

俺は思わず湯のみを落としそうになった。幸い何とか寸前で踏ん張ったので事故にはならなかったが、驚いた俺は思わず「な、何で？」と誘い言葉に返すべきではない言葉を言ってしまう。

こちらに振り返った小真希は俯き加減にタブレット状のエサの入った真空パックを手でいじっている。心なしか、その頬が赤らんで

いるようにも見える。

「な、何でと言われましても。そのお……」

俺のルール違反な返答に対し答えにくそうにゴニョゴニョと何事かをつぶやく小真希。

「いや、ごめん。びっくりしちゃって」

「あ、あの。決して変な意味じゃなくて、私友達と一緒にどこかに行くって経験に憧れてたんです。あ、先輩は友達じゃなくて先輩ですけど。だ、だから、バレンタインを先輩と過ごせたらすごく楽しいだろうなあって……」

「いや、別に俺といても楽しくも何ともないぞ」

「た、楽しいですよッ」

珍しく声を大きくして言う小真希に驚きつつ、俺は「まあ、別に予定らしい予定もないし。お前がいいなら別にいいぞ」と了承する。どうせあったとしても田崎とかと騒ぐか家にいるかしかないのだから。バレンタインなんて、所詮は普通の日だからな　考えているうちに寂しくなってきたぞ、おい。

「ほ、本当ですか？」

なぜか嬉しそうに言う小真希に俺は「ああ」と答える。正直、小真希はかなりかわいい子だから、そんな子とバレンタインを過ごせるのだから断る理由がそもそもない。

小真希は俺に近くに駆け寄って来ると、「じゃ、じゃあ、約束ですよ」と嬉しそうに小指を立てる。何とも古風というかわいらしい行動だ。俺は笑いながら同じように小指を立て、小学校低学年の頃以来のゆびきりをする。

こうして、俺と小真希のバレンタインが決まった。

今思えば、これってデートなのではという事を、この時の俺は気づいていなかった。

棋士姫と囲碁デート

そしてバレンタイン当日。

街を支配するバレンタインムードは最高潮に達し、そこかしこでカップル連れがチョコよりも甘いムードを全力全開で放出しまくっている。去年までの俺ならイライラして田崎に止められるのだが、今年は違う。というか、それどころではない。

待ち合わせ場所の噴水公園の噴水の前。俺はまあ待ち合わせの三〇分前にやって来た。こういう場合男の方が先に来て待っているというのが常識だからだ。だが、そんな俺の計画は根底から粉碎される。

なぜなら、噴水の前にはすでに小真希の姿があったからだ。

いつもの制服姿とは違う私服姿だ。ワインカラーのカットソーにチエック柄のスカート。トグルボタンの薄桃色のカーディガンに小麦色のマフラー。ハートや星マークが切り抜かれたような金色のオシャレベルトにカーキ色のフリンジブーツ。頭には真っ白な三枚のふわふわ羽の髪留め。しかもトレードマークとも言うべきメガネをしていない所を見ると今日はコンタクトをしているのだろう。その姿はまさに至って普通の、本気オシャレ服を装備した少女であった。

俺は小真希のその《普通の女の子》な姿について見惚れてしまった。正直、俺の中で小真希のイメージは《絵に書いたような文系のかわいい地味子》という、オシャレとは程遠い存在に思っていた。それが今自分の視界に映る彼女は、そんな地味子を脱ぎ捨てて一人のかわいい女の子として立っている。うつすらと化粧もしている上にメガネがない彼女の顔は、いつもは隠れてしまっている彼女本来のきれいさを存分に開花させている。

がつつりオシャレをしているのではなく、素材を十二分に引き立てさせる見事なチョイスだ。ぶっちゃけ、そこら辺を歩いている女子より小真希の方が全然かわいい。というか、遠巻きに何人もの男

達が小真希の方を見ている。いつもは絶対注目されない地味子も、聖なる日には輝けるらしい。

このままもう少し見ていたい気もしたが、早く行かないとあのかわいさならナンパされてもおかしくない。そもそもそれ以前にいつまでも女の子を待たせておく訳にはいかない。俺はうつむき加減で立っている小真希の所へと早足で近寄る。

「ごめん小真希。待たせないように早めに来たつもりだったんだけど……」

俺が声を掛けると、小真希は顔を上げた。そして俺の姿を視界に捉えるとほっとしたような表情になった。

「い、いえ。予定の時間よりだいぶ早く到着してしまったのは私の責任ですから。お構い無く」

「本当だよ。待ち合わせ一時間間違えてたかと思った」

そう言うつと、小真希は「私だって三〇分も早いからビックリしましたよ」とはにかむ。

「まったくだ。田崎達とだったら平気で遅刻するのにな」

「それひどいですよ」

さっきまでの緊張顔がウソのように楽しそうに笑う小真希の姿に俺は内心ほっとする。やっぱりいつもの小真希の方がこちらとしても安心ができる。

「それじゃ、ちょっと早いけど行こうか」

「はい」

俺と小真希は一緒になつて歩き出す。公園から出た所で、小真希はそつと俺の手を握り締めた。ふわふわの手袋から伝わる彼女の温もりは、手袋をしていなかった俺の手を優しく温めてくれた。

「そういえば、どこに行くんだ？」

俺の問いかけに対し、小真希は「秘密です」とはにかみながら言うつてそれ以上は語らない。俺は特に追求する事もなく「そうか」とだけ返して小真希と並びながら歩く。

街にはカップルの姿が多く見られ、傍から見れば俺達もそういう

関係に見えなくもないだろう。しかも今の小真希はそんじよそこらの子より全然かわいい。その証拠に先程から彼女は結構注目され、俺もまた羨望の眼差しを受けている。少しだけ優越感を味わえた。

「あの、先輩。私の格好、変じゃないですか？」

そんな時に小真希が不安そうに俺にそう尋ねてきた。俺が「変じゃないぞ」と答えると「でも、さっきから周りの人に見られているような気がして……」と小さな声でつぶやく。どうやら周りからの慣れない視線を悪い方に捉えてしまったらしい。

不安そうに小真希は念押しするように「変じゃないですよね？」

と俺に尋ねてくる。だから俺ももう一度言っただけ。

「変じゃないって。むしろ今日のお前めちゃくちゃかわいいぞ」

「か、かわ……ッ!？」

言ってから自分が猛烈に恥ずかしい事をぶっちゃけている事に気づき俺は恥ずかしくて視線を逸らした。ちらりと小真希の方を見ると、彼女も顔を真っ赤にして伏せてしまっている。どうやら余計な一言だったらしい。

心の中で謝りつつ、俺は無言で歩き続ける。隣を歩く小真希も気まずいのか黙ったまま一緒に歩き続ける。ただ、握られた俺達の手だけはずっと繋がられたままだ。

バレンタインに彩られた街へ、俺と小真希は手を繋ぎながら溶けていった。

バレンタインにデートをするカップルは多い。だからか、道を歩いているカップルとばかりすれ違う。そんな中俺と小真希は揃って歩いているので、カップルに見えるかもしれない。まあ、俺と小真希がじゃ釣り合わないけどな。

「どこもかしこも必死になってチョコを売ってるなあ」

バレンタイン当日とだけあって、最後の売りを行う店は数多い。何せ、明日になればチョコは全く売れなくなり、半額とかにしても売れ残ってしまう。クリスマス後のケーキの半額売りと同じ現象だ。

それを見て、そういうイベントをお菓子会社の陰謀だと思ってしまう俺は、本当に心が氷のように冷たいのだろう。

「でもさ、売り物のチョコを貰ってもあんまり嬉しくないんだよね。やっぱり手作りじゃないと」

まあ、買ったチョコでも貰えば嬉しいんだけどな。と俺は一人心中で苦笑してみる。何だかんだ言って、男であるからにはこういうイベントがあった方が嬉しいのだ。まあ、大概は落胆する事になるのだが、その辺は思考の隅にでも片付けておこう。

「あ、あの。先輩もやっぱり手作りチョコの方がいいんですか？」俺の独り言に小真希が反応する。

「そりゃ手作りの方が嬉しいさ。その方が気持ちが詰まっているよ。うな気がするでしょ？」

「そ、そうですか。そうですか……」

なぜか安堵したようにそう繰り返す小真希。俺が「どうした？」

と訊くと、小真希は「な、何でもないですよッ」と慌ててはにかむ。俺は少し疑問に残りながらも、特に気にする事もなく歩く。その横を、小真希も続く形だ。

「それにしても、こんなんでも良かったのか？」

俺は先程までいたゲームセンターという選択について少し疑問が残った。てつきり映画でも観に行くのかと思っていたが、小真希は「ゲームセンターに行ってみたいです」と言って、俺はとりあえずいつも田崎などと一緒に行く近くのゲームセンターに行った。今はその帰りだ。

「バレンタインにゲーセンって、イベントとして変じゃなかったかな？」

「いいんです。私、一度ゲームセンター言ってみたかったです」

「何だ。行った事なかったのか？」

「一人で行くには、ちょっと怖かったですから」

まあ、女の子が一人で行くような場所ではないわな。事実、ゲームセンターというのは男が多い場所で色々と危なかったりする。特

に今日はバレンタインという特別な日だけあって、逃げるようにゲーセンに入っている人も多い。何となく、格ゲーをやっている青年の背中に哀愁があったりなかったり。

「それにしても、先輩ってゲームお上手なんですね」

そう言う彼女が手に持っているのは、先程のゲームセンターのUFOキャッチャーで手に入れたウサギのぬいぐるみだ。

「いや、偶然だよ偶然。ほら、穴のすぐ近くにあったでしょ？ あれなら取れるかなと思ってさ」

事実、俺はゲームセンターに来てもしューティングゲームなどを好んでプレイするので、UFOキャチャーなんて見もしない。だが今日はさすがに女子と来ているので、ゾンビを撃ち殺すようなゲームは控えてみたのだが、どうやら正解だったようだ。

「それでもすごいですよ。私、これ大切にしますね」

そう言っただけで小真希は明らかに安物であるうそのぬいぐるみを嬉しそうに抱きしめる。わずか200円くらいでこんなにも喜んでもらえるとは、嬉しい誤算だ。

「そう言われると、がんばった甲斐があるよ」

俺は少し照れながらそう言っただけで、前を向いて歩く。何となく、今は小真希と顔を合わせるのちよつと恥ずかしかった。

小真希も同じなのか、一歩引きながら横を黙って歩いている。ただ、しっかりと俺は彼女の手を握り締め続ける。

「それじゃ、次はどこに行く？」

しばらくしてから、俺は何気なく訊いてみる。何せ、今現在は特に目的もなく歩いているだけだったので、そろそろ目的を定めないといけない。

「そうですね。じゃあ」

小真希は嬉しそうに、場所を告げる。

パチッ……

静かな部屋に響くのは、石が盤を叩く音。

白石が打たれた場所は、またしても俺の陣地の弱い場所。すぐにこちらも石で防壁を作るが、向こうはお構いなしに次々に二つ飛ばしや桂馬打ちで臨機応変に対応できる戦線を展開する。

俺は苦しい状況に唸りながら、それでも石を打つ。

「なあ、一つ訊いてもいいか？」

「何でしょうか？」

俺が打った石のすぐ隣に石を打ち込まれる。打たれた白石のすぐ隣にはすでに打たれている別の白石が。しかし俺の黒石は周りに味方がいない。仕方なく一目飛ばしで線を繋ぐが、またしても先手を奪われてしまう。

俺は為す術がない事と、今の状況に苦笑しながら言う。

「何でこんな所に来たの？」

俺達が今いるのは駅近くにある碁会所。所謂、囲碁版のゲームセンターという感じか？ お金を払って色々な人と囲碁を打つ場所だ。周りにいるのは、主に中年の男性ばかり。若者とは言えば、俺と小真希以外には20代くらいの青年が一人と、俺達と同じくらいの年齢の女子が二人。男子が二人、それくらいか。それでも学生くらいの人が自分達以外にもいる事に少し驚く。

勝負がつき、碁石を片付けながら小真希は恥ずかしそうに打ち明ける。

「一度来てみたいと思ってたんですけど、ここも一人じゃちょっと入りづらくて……」

確かに、ここも先程のゲームセンターとは別の意味で入りづらい。基本的にはおっさんの集まる場所だからだ。学生とおぼしき連中はどうやら別の高校の囲碁部に属している連中らしく、しかも結構常連なのか他の中年の男性などと楽しげに話している。

残念ながら、桜上高校囲碁部はまともに活動しているのは俺と小真希だけだが。

「いつもはネットの中で対人戦をしているんですが、やっぱりこうして実際に会って戦ってみたくて……」

実際の対戦相手はどうやら俺が父親だけらしい小真希。父親とはいい勝負になるが、たまには別の人とやりたかったらしい。俺では全く相手にならないしな。

「ならさ、俺と打ってないで他の人と打てばいいだろ？」

せっかく暮会所に来たと言うのに、小真希は先程からずっと俺と打っている。これではいつもの部活と何ら変わらないではないか。すると、小真希は恥ずかしそうに頬を赤らめてもじもじとする。

それを見て、すぐに俺はわかった。要するに、恥ずかしくて声を掛けられないのだ。小真希は人見知りが激しい子だという事は、これまでの経験で十分わかつているしな。

「……要するに、橋渡しになればいいのか？」

「あ、別にそういう訳では……」

「いいっていいって。それくらいなら任せておけって　　おい」

俺は早速年が近い他校の囲碁部四人組に声を掛ける。いきなり中年のおじさん相手では小真希は辛いだろうから、とりあえずは接しやすい同世代からだ。

俺が声を掛けると、向こうもどうやらこちらが気になっていたらしくすぐに反応してくれた。俺達も囲碁部だと話すと、向こうもわかつてはいるが囲碁部だと明かす。後は同世代で同じ趣味を持つ者同士だ。

俺はとりあえず傍観に徹する事にした。残念ながら向こうの囲碁部には俺くらいの実力の子はいなかったのだ。

とりあえず、向こうの女子の一人と小真希が戦う事になった。緊張しているのか、小真希は隣に立つ俺の服の裾を片手でずつと掴んだままだ。向こうの連中が微笑ましげに俺達を見ているのに気づき、俺は何とも言えない複雑な笑みで返すしかない。

これで小真希に友達が増えればいいのだが……と思ったいたのだが、案外それはすんなりだった。

小真希の強さはやはりここでもずば抜けていた。最初に相手にした女子（10級所持者）を簡単に粉砕すると、女子（8級所持）、

男子（12級所持）、男子（5級所持）もことごとく撃破。彼女の快進撃に他のテーブルのおっさんなども注目し、次々に対戦を挑まれる始末。

結局、ほぼ全員と相手にした小真希はほとんどの戦いで勝つ事ができた。ただやはり上には上がいるもので、自営業をしているという中年男性と店のオーナーには僅差で負けてしまった。俺としては本気の小真希が負けている姿は初めてだったので、実に珍しい体験になった。

結局、ファストフード店のハンバーガーで昼食を済ませてから俺達はずっと暮会所に缶詰になった。

帰る頃には、すっかり日が暮れていた。

チョコと聖夜の誓い

「楽しかったか？」

「すっごく楽しかったですッ」

そう言っつて小真希は嬉しそうに答える。

他校の囲碁部の連中とはまた後日会おうという約束まで取り付けてしまったし、終わる頃にはおっさん達とも小真希は楽しげに話せるようになっていた。俺としても丁寧に戦い方を教わったりできたので、いい経験になった。

「でもさ、バレンタインの日に行く所ではないよな」

俺が苦笑しながら言つと、小真希もそれは自覚していたのか恥ずかしそうに頬を赤らめて「す、すみません……」と身を小さくして謝る。

「別に責めてる訳じゃないよ。ただ、面白い経験ができたなあっただけさ」

さっき田崎からメールが来た。今、奴らは今から駅のカラオケに向かう所らしい。向こうに参加していたら経験できなかった事は事実だ。

駅周辺はまだライトアップされていたりして賑やかだったし、カップルもある意味これから本番と言いたげに激甘ムードを漂わせていたし、商店はついに三割引や半額でチョコを殴り売りを始めている。それらを見て、バレンタインが終わるのだなあと感じた。

特にバレンタインらしい事はしていないが、いい一日だったとは断言できる。

「今日は、すっごく楽しかったです」

隣を歩いていた小真希は唐突にそう言つた。俺が振り返ると、小真希は笑顔だった。それを見て俺も自然と微笑む。

「なら付き合った甲斐があったよ」

「先輩には本当に感謝しています。私が今まで行きたくても行けな

かった所に、楽しく連れてってくれて」

「お前にはいつも世話になってるからな。これくらい何でもないさ。いつでもまた付き合ってやるからさ、また言えよな」

俺の言葉に小真希は恥ずかしそうにはにかみながら、小さくうなずく。俺はその笑顔に満足しながら歩き続ける。気がつくと、一日の始まりとなった噴水公園に着いていた。公園の中にはカップルの姿がいくつもあり、チョコを渡している最中の者や、抱き合っている者、終いには現在進行形でキス中のカップルもいる。とりあえず、さりげなく俺は小真希を連れてそういうものが見えない場所に移動する。気づいたら小恥ずかしいし、何となく小真希には見せたくないかった。

「それじゃ、そろそろ帰るか？ 時間も時間だし、家まで送って行くよ」

足を止め、振り返って小真希に向かい合いながら言う。すると、小真希は少し残念そうな表情を浮かべて「そうですねえ」とつぶやく。

「一人で帰れます。それじゃ、ここで失礼しますね」

「おう。また月曜日、部室でな」

俺は簡単に別れのあいさつを済まし、今からでも田崎達の所にも行ってみるかなどと考えながら歩き出す。

「あ、あのッ」

背後から小真希に呼び止められる。何事かと思って振り返った瞬間、目の前に何かが突き出された。一瞬、目の前のそれが何だかわからなかったが、それはラッピングされた小さな箱であった。それを突き出すように握っているのは、小真希であった。

小真希は顔を真っ赤にしてフルフルと震えながら俺にその箱を差し出し続ける。それがバレンタインチョコだと気づくのは、そう時間は掛からなかった。

「あ、ありがとう」

俺は驚きながら、そのチョコを受け取る。が、小真希はなぜか

チヨコを離そうとはしなかった。俺相手に緊張のあまり硬直してしまっているのか。とりあえず、俺は困る。

「えっと、もらっていいんだよね？　なら、手を放してほしいんだけど」

「……わ、私も一緒です」

「はい？」

つぶやくように言う小真希はゆっくりと顔を上げる。それはもう病院に行った方がいいんじゃないかというくらいに顔を真っ赤にさせた小真希は、ガチガチに緊張している。それでも、勇気を振り絞るようにして、震える口を開く。

「ちよ、チヨコと一緒に、私も貰ってくださいッ」

古風な子だとは思っていたが、決め言葉まで古臭い。それって一体何年、下手したら十何年前の決め言葉ではないか？

何というか、一瞬それが告白である事すら忘れてしまうくらい俺は呆れていた。でもまあ、何というかすごく小真希らしいのも事実だ。

「えっと、それは付き合うとかっていう話かな？」

俺もそれが告白だと理解するにつれて恥ずかしくなり、おそらく俺も顔が赤くなっているだろう。寒い夜なのに、体は暑いくらいだ。俺の問いかけに小真希は小さくうなずき、顔を真っ赤にさせたままぎこちない、でもかわいらしい笑みを浮かべる。

「先輩の事、ずっと好きでした。初めて会った時からずっと……こんな私で良ければ　付き合ってください」

顔を真っ赤にさせ、ブルブルと体は震え、今にも泣き出してしまいそうな状態の小真希。俺はそんな彼女を見詰めながら、何となく彼女との思い出を振り返ってみる。

初めて会った時からかわいい子だとは思っていた。気配り上手で謙虚で、それでいてすごく優しいとてもいい子だ。彼女にするなら非の打ち所がないくらい。

そんな子が自分を好きになってくれた事が今でも少し信じられな

いが、目の前で緊張しまくっている小真希は現実だ。

俺は小真希が好きだ。友達とか後輩としてそう接していたが、今思い返してみればきつとずっと好きだったのだろう。じゃなきゃ、文化祭の日の俺の決断の納得がいかない。今、ようやくあの時の自分を突き動かしていたものがわかった。

自分の気持ちはわかった。そして彼女の気持ちも。断る理由など、ある訳がない。

「こんな俺で良ければ、よろしく頼むよ」

俺もまた恥ずかしそうに言うと、小真希の顔が見る見るうちに笑顔になっていく。先程までの緊張だらけとは違う、心から喜んでいる笑顔だ。

「あ、ありがとうございますッ」

「こちらこそ、ありがとうな」

俺が恥ずかしそうに手を差し出すと、小真希も恥ずかしそうにその手を握り締めた。さっきまでと違って、俺まで緊張してしまう。かわいい後輩からかわいい彼女に変わると、こんなにも一つ一つの動作に緊張してしまうのか。

これで俺達は恋人同士になった訳だが、逆に恥ずかしくてお互いに顔を見られなくなってしまう。

このままお別れ……という訳にはいかないだろう。だがぶっちゃけ人生で初めてできた彼女を相手に軽くパニックしている俺は対策が一切浮かばない。

妙な沈黙が、俺達の間而降りてくる。

「あ、あの……迷惑でしたか？」

俺が気まずそうに黙っているのを見て、小真希は心配そうに声を掛けてくる。

「め、迷惑なんて思っていないぞ。う、嬉しいくらいだ、うん」

「そ、そうですか……」

そして、またお互いに黙ってしまう。

何か手はないか……必死になって思考を巡らせていると、ポケッ

トの中の携帯がブルブルと震え出した。チャンスとばかりに俺は小真希の手を解いて携帯を取り出すと、メールだ。差出人は田崎だ。メールを開くと、今カラオケで騒いでいるんだがお前も今から来るか？ という内容だ。俺はこれに飛びついた。

「か、カラオケ行くかッ！」

気がついたらそう叫んでいた。俺が大声を出したものだから小真希は一瞬ビクツと驚いた後、「か、カラオケ……ですか？」と問い返してくる。

「そうカラオケッ。今俺のクラスの連中が騒いでるらしくてさ、今から来るかって誘われたんだけど、お前も来るか？」

たかがそれだけ言うのに緊張しながら言う俺。何というか、ちょっと自分が情けなくなってきたぞおい。

俺の問いかけに対し、小真希は少しの間考えるように黙った後、「わ、私なんかがご一緒して大丈夫ですか？」と不安げに訊いてきた。

「当たり前だろ？ 何たってお前は俺の　か、彼女なんだからさ」
言ってみて、俺はその二文字が猛烈に恥ずかしい事に気づく。小真希も彼女と言われ、顔を真っ赤にして黙ってしまう。

またしても妙な沈黙が流れるが、小真希はゆっくりと伏せていた顔を上げる。

「じゃ、じゃあ、お願いします」

「お、おう」

俺は緊張しながら、もう一度手を差し出す。小真希もまた緊張しながらその手を握り締める。温かくて、柔らかくて、小さな彼女の手。

俺は緊張しながらも、小真希が彼女になった事が嬉しかった。それはきつと、小真希も同じだ。そう信じたい。

俺と小真希は手を繋ぎながら、また駅の方へ向かって歩き出す。公園に入って来る前は先輩と後輩だったが、今こうして出て行く時は彼氏と彼女の関係になる。

「あ、雪……」

彼女の声に気づいて空を見上げると、チラチラと雪が降ってきていた。都会とまではいかないが、田舎でもないここは雪はあまり降らない地域だ。だからこそ、こうして降るととても美しく見える。いつも見ている街並みが、変わる。

「寒くないか？」

いつの間にか、俺の緊張はかなり落ち着いていた。小真希はまだ緊張している様子だったが、最初に比べればこちらもずいぶん落ち着いている。

「大丈夫です」

「そっか……」

俺は小真希の手を繋ぎながら、歩き続ける。時間を確認すると、まだ8時くらいだ。小真希の帰宅時間はどれくらいだろうか？ 親御さんが心配するのではないか。電話の一本でも入れさせようか。などと色々な事を考えていると、

「……あの」

その声に足を止めて振り返ると、小真希は照れたように微笑みながら、スツと手を放して俺の目の前に小指を立てた。

「……一緒に、囲碁大会に出ましようね 秋斗先輩」

俺はうなずきながら、その指をしっかりと結んだ。

俺と小真希の、小さな約束だ

手に持ったチヨコのリボンの上に、そつと雪の結晶が彩られていた……

チョコと聖夜の誓い（後書き）

という訳で、今回も前回の俺と妹と偽装デート大作戦と同じ一人称で描いてみました。

やっぱり一人称だと苦勞しますね。一人の視点のみで描かないといけないので。

今回のテーマの一つは囲碁なので、作品の重要な場面で囲碁が登場します。その他簡単なルール説明などもチラホラと。

なぜ囲碁のルールを僕が知っているかと言うと、実は高校は文芸部でしたが中学の頃は囲碁部に属していたのです。地区大会3位入賞した事もありますし、世界で通用するくらいのレベルである5級という階級を認定してもらっています。

……まあ、囲碁はもう何年も打っていないのもうそんな実力はありませんが。とりあえず簡単なルールくらいならまだ覚えているので。

そしてもう一つのテーマは純愛です。実は僕の作品で主人公とヒロインがハッピーエンドを迎えて結ばれた作品は今までありませんでした。

僕の代表作である艦魂年代史では本編外伝共に主人公とヒロインは結ばれるも死に別れますし、もう一つの代表作である恋姫狩人物語は現在もそういう関係には発展していません。前回の俺と妹は実の兄妹なのでそういうルートはありませんし。

なので、今回の作品は黒鉄大和が描いた中では初めてちゃんとハッピーエンドを迎えたカップルの作品という事になります。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

前回も言いながら結局達成できませんでした。またこういうイベントなどがありましたらこんな感じで短編を描いてみようかな、なんて。

その時はまたよろしく願います。

それまでは、既存のシリーズの執筆に専念していますので。
改めまして、最後まで読んでくださりありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9315q/>

俺と棋士姫とバレンタイン

2011年2月14日23時22分発行